

チーム・ティーチング 技術通訳・翻訳者の養成を目指して

モンゴル モンゴル国立技術大学外国語学部日本語学科講師(青年海外協力隊員)

洞野綾子・中畑浩枝

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。



日本語の授業を受ける学生

1 はじめに

モンゴルでは、1990年の民主化以前、外国語教育といえばロシア語であったが、民主化以降、英語、ドイツ語、日本語などの教育もさかんに became. モンゴルでの日本語の人気は高く、現在日本語を教える教育機関も増えてきている。「日本語教師会」もでき、大学、小・中学校、その他の日本語教育機関20校あまりの日本語教師が集まって、定期的にセミナーなどを行っている。

2 コースの概要と目的

モンゴル国立技術大学では、1996年9月から日本語教育が開始された。モンゴル語 - 日本語の「技術通訳・翻訳者養成コース」としてスタートしたもので、今年で4年目となり、6月に初めての卒業生を送り出す予定である。現在日本語学科には、専攻生のみ110名の学生が在籍しており、学生は日本語のほか、コンピューターなどの技術科目や、数学、幾何学、物理などの理系科目もあわせて受講している。

近年、モンゴルと日本の交流が盛んになるにつれ、観光客をはじめ、研究者、技術者、ビジネスマンなど、たくさんの日本人がモンゴルを訪れるようになった。モンゴルに住み、仕事をしている日本人も少なくない。このように交流の機会が増えるにしたがって、当然、モンゴル語 - 日本語の通訳・翻訳者が必要になってくるのだが、現在のところ、通訳・翻訳者としての実力を持つ人材は、非常に少ないと言っていいだろう。特に、技術通訳者は、まったく不足しており、技術通訳・翻訳者を育てようという「技術通訳・翻訳者養成コース」の試みは、今のモンゴルの需要に合ったものだと言える。しかし、それは、私たち教師にとってやりがいがあると同時に、たいへん難しい試みでもある。一般的な日本語以外に、どのように技術の専門用語を教えるか、どうやって通訳・翻訳ができる力を身につけさせるか、常に考えさせられている。

3 モンゴル人教師と日本語教師の役割分担

1999年9月から、モンゴル国立技術大学では、科目選択制を取り入れた。このため日本語学科では、これまで

の必修科目の他に選択科目として、技術日本語、日本語情、日本史などの科目が加わった。カリキュラム・使用教材については、表1・2のとおりである。

現在、日本語学科の授業は、全部で1週間に49コマ（1コマ=90分）あり、3人のモンゴル人教師と2人の日本人教師とで分担している。「文法」の授業と、2年生までの「翻訳」の授業をモンゴル人教師が、「会話」の授業を日本人教師が受け持っている。そして、3年生後期からの「文法」と、3年生からの「翻訳」、また、選択科目である「技術日本語」の授業は、モンゴル人教師と日本人教師がチームを組んで受け持っている。

今回は、モンゴル人教師と日本人教師と一緒に教室に入って授業を行う、3年生からの「翻訳」と「技術日本語」（選択科目）について、触れてみようと思う。



「技術日本語」チーム・ティーチングの様子

4 チーム・ティーチング

(1) 「翻訳」での試み

「翻訳」の授業では、3年生からは、自作の教材を使用している。自作の教材を使う理由は、ひとつには、モンゴルの事情に合ったものを教材とすることである。教材のテーマは、できるだけ実用性の高いものや、機会さえあればすぐにでもモンゴルで使えるようなものを選ぶ方針にしている。もうひとつの理由は、語彙や表現を、ただランダムに増やすのではなく、体系づけてまとめるためである。というのは、今のモンゴルの状況を考えると、よい辞書の入手はたいへん難しく、学生たちが将来、技術通訳や翻訳の仕事をする時には、膨大な数の専門用語を自分で集めて、まとめることが必要になってくると思われるからである。学習した専門用語を、実際に使う力を身につけることも、この授業の目標である。

教材作りや授業は、たいてい次のように行っている。

まず、教材は、モンゴル人教師に助言してもらいながら、日本人教師が日本語で作成する。例えば、「観光ガイドをする」「論文を書く」「公式の場で話す」など、場面や状況によって変わることばづかいに焦点を置いたり、

表1 授業内容と1週間あたりのコマ数

(1コマ=90分)

	前期16週(9月~)	後期16週(2月~)
1年生必修	文法 3 会話 3	文法 3 会話 3
2年生必修	文法 3 会話 3	文法 3 翻訳 2 会話 3
3年生必修	文法 3 翻訳 3 会話 2	文法 3 翻訳 3 会話 2
4年生必修	文法 3 翻訳 3	文法 3 翻訳 3
選択科目 (変更あり)	技術日本語 3	技術日本語 3 日本史 3 日本事情 3

1~3年生は、上記のコマ数×2クラス、4年生は1クラス。

表2 主な使用教材

	文 法	翻 訳	会 話
1 年 生	『新日本語の基礎 I・II』(スリーエーネットワーク) 『新日本語の基礎 漢字練習帳 I・II』(スリーエーネットワーク)		各種テープ教材 自作教材
2 年 生	『中級J301』(スリーエーネットワーク) 『文化中級日本語 I』(凡人社)	『科学でゲーム』	各種テープ教材 自作教材
3 年 生	『文化中級日本語 II』(凡人社) 自作教材	自作教材	『待遇表現』 (The Japan Times)
4 年 生	自作教材	自作教材	
選 択 科 目	技術日本語・・・自作教材 日本史・・・自作教材 日本事情・・・『日本事情入門』(アルク)		

「動植物」「博物館」「交通」「気候」「地形」など、テーマごとに語彙や表現をまとめていく形をとったりしている。できた教材から、今度はモンゴル人教師が、日本人教師と相談しながら、一番適当なモンゴル語訳を見つける。

教壇には、主としてモンゴル人教師が立つが、授業の進め方や方法については、両方の意見を合わせておく。教室では、日本語からモンゴル語へ、モンゴル語から日本語への翻訳、また、通訳の練習なども取り入れている。こうした授業は、日本語のネイティブ教師とモンゴル語のネイティブ教師の両者がいなくてはできないものだ。両者が、お互いの文化を少しなりとも知っているということも、大きな利点になっている。

(2) 「技術日本語」への取り組み

今年度の9月から始めた「技術日本語」の授業は、ある程度基礎的な日本語学習が終わった3、4年生を対象に、選択科目という形で行っている。当日本語学科では、以前、理工系の教科書を使って日本語を教えるという試みもなされたことがあった。しかし、そういった教科書のほとんどが、物理や化学といった、直接実用にはならない教養的なものであったり、専門の研究を進めたい人たちのために書かれたものであった。技術通訳をする場合、必ずしもそういった理科の教科書的な日本語が必要ではなく、機械、部品の名前といったもののほうが必要になってくるのではないかと私たち教師は考えた。そこで、専門の技術者から技術用語を取材して教えていこうというのが、現在の「技術日本語」の方針である。

授業の準備段階から流れを説明すると、例えば自動車についての授業をする場合、まず、日本人の技術者から、自動車についての技術用語や各部品の名前、そしてそれがどのように動いているかなどのしくみを日本語で取材する。それを日本人日本語教師と技術者とで協力してテキスト・資料といった形にまとめ、それをモンゴル人教師が読んでモンゴル語の技術用語を調べ、授業にのぞむ。学生は授業で、日本語のテキストを読みながら、内容を把握していく。その際、日本語からモンゴル語に通訳する場合を考えて、技術用語は丁寧に訳していく。日本語の文法や会話を習う場合は、必ずしもそれを正確に本国語に訳する必要はないが、技術通訳が目的のこの授業においては、この、語彙を訳すという作業が非常に大切になってくる。一般に耳慣れない、難しい技術の場合は、概要をモンゴル語で説明し、その後日本語のテキストに入るということも必要になる。

この授業は、将来的にはモンゴル人教師がひとりで教える予定だが(注)、現在のところは、日本人技術者が使う日本語を取材する、そして、それをモンゴル語に訳していく、という作業が必要のため、チーム・ティーチングでなければ進められない授業である。そのため、日本人教師とモンゴル人教師の打ち合わせの時間も必要となり、非常に手間のかかる授業となっている。

これだけの手間をかけても、技術についてほんのさわりだけしか教えることができない、様々な分野の技術を教えても、将来学生がどの程度実際に使うものなのかわからない、モンゴルにいる日本人技術者が限られるため分野ごとに体系だてた授業ができない、などのさまざまな悩みを抱えながら授業を進めているが、最終的にはこの授業が、学生たちにとって、もっと深く専門の授業について学んでいくきっかけ、手助けになれば、と考えている。

5 チーム・ティーチングを試みて

上に紹介した2つの授業は、技術通訳・翻訳者を養成するという目的に最も近いものだとと言える。しかし、モンゴル人教師と日本人教師がチームで授業を作ることの欠点は打ち合わせにたいへんな時間がかかることである。さらに、モンゴル人教師と日本人教師の授業運営についての意見ががみ合わないこともあり、調整に手間取ることもある。

一方利点は、モンゴル語と日本語両方のネイティブ教師がいるため、翻訳のチェックが正確にできること、単に辞書的な訳ではなく、文化的な背景を踏まえた生きた翻訳ができることである。通訳の練習をする時は特に、両者が揃っていることで、学生たちのやる気も、安心感も増しているように思われる。

私たちはいつも、学生が日本語を使って仕事をすることを頭において、授業を行っているが、実際に通訳・翻訳者として仕事ができる者は、ほんの一握りである。しかし、少しでも多くの学生たちが、社会に通訳する日本語力を身につけて卒業してほしいと願っている。

(注)モンゴル国立技術大学では、1996年の日本語通訳・翻訳者養成コース開設時から、たいてい2名の青年海外協力隊員が派遣されている。協力隊員は、モンゴル人教師らが自分たちで日本語学科を運営できるよう、協力している。